※タイトルイラストは、「地球生活記」の写真をもとにおこしたものです。(イラスト／持留和也)

1 2

このページは旧フォーマットで表示しています。

Like 0　ポスト

そもそも日本の家は、太陽と大地の恵み、つまり自然素材だけでできていたのものです。これは日本にかぎらず、人はみなそうやって家をつくってきました。それが、今では、あたりまえなことではなくなってしまっています。なぜなのでしょうか？　これからどんな方向に向かえばよいのでしょうか？

■そもそも家とは 身近な自然素材でつくるものだった

「地球生活記」というすばらしい本があります。副題は「世界ぐるりと家めぐり」。写真家の小松義夫さんが、世界各地の、その気候風土の中から生まれた「ふつうの家」を取材してまとめた大判の写真集です。それを見ると、世界中の家々が「身近で調達できる材料でつくられている

」ことがわかります。ページを繰っていくと、家をつくっている材料はおよそ、土、石、木、草や葉、動物の皮に分類されます。人は大地そのもの、そして大地に生え、太陽の恵みで育つ動植物をうまく使って、家をつくってきたのです。 そしてどの地域の家も「その気候風土に暮らすのにもっともよく合った工夫」をしています。湿度の高い、暑い地域では、床が高く、開口部の大きい風通しのよい家をつくっています。直射日光のきつい、乾燥した地域では、日干し煉瓦や土と石で、太陽光から身を守るしっかりしたシェルターを確保します。寒い地域では、石や氷、あるいは横に積んだ木でつくった強固な壁で室内を外気から閉ざします。それぞれの地域での自然の理にうまく添う、人々の知恵と技とが、長年にわたって連綿と伝えられてきたのです。

■日本の家は 木と土、竹、草、石でつくられてきた

緑豊かな日本では、古来から木が主な建築材料でした。何世代か先に家を新築する可能性を見越して、自分の山で木を育て、子孫に残す習慣もあったようです。その木を、礎となる石の上に、木がもともと生えていたのと同じような向きに、柱として立て、梁や桁を渡して組み、「木造軸組」（詳しくはそもそもの壱参照）とよばれる構造をつくりました。柱と柱の間は、あるいは土塗り壁や板壁に、あるいは木と草の繊維からつくられた紙でつくった建具（そもそもの参参照）を入れ、開口部と壁とをうまく組み合わせて暮らしたのです。 屋根の素材には、地方ごとに、さまざまなバリエーションがありました。藁、萱などでつくる草屋根、土を堅く焼き締めた瓦屋根、杉皮や檜皮で葺いた屋根や、鉄平石のような割石を使った屋根もあります。村の共有である入会地で採った草や、稲刈りの後の藁、製材途中に出る木の皮、身近な割りやすい岩からとれる石など、材料の調達がたやすいものが選ばれました。瓦は、粘土を練って、さまざまな形に成型し、焼き締めた、古代からあった最も古い建材です。 夏の暑さや湿気に対しては開放的なつくりで構える一方、冬の寒さや台風に対しては閉じるための工夫をしていました。四季のはっきりしている日本では、季節によってしつらえを変えることで、環境の変化に対処しきたのです。今では「メンテナンスフリー」がいいように言われますが、昔は季節毎に畳をあげたり、雪囲いをしたり、縁の下を開け閉めしたり、まめに気働きしたものでした。それが、生活のメリハリとも、歳時記ともなったのです。

■現代住宅に使われる新建材や木質系材料

木を挽いて、削り、組む。土と水を混ぜ、練って、塗る。一昔前までは、自然にある素材を一次加工することで家の材料としていました。今の家は、どうでしょうか。何回も塗り重ねてつくた土壁や無垢板の壁は、合板や石膏ボードの上にビニールクロスを貼った壁に、無垢の板を何枚も張っていた床は、広い面をカバーする合板類や積層フローリング材、板目模様の塩ビのフロアーシートなどに、取って代わりました。柱や梁は外材の集成柱。それを覆う壁の仕上げは、一見タイル風、石貼り風のパネル状になったサイディングを張り、部分的に一点豪華な輸入の石張り。これらはみな量産工場で生産されたものであったり、商社経由で輸入された建材がほとんどです。特に工場生産されたものを「新建材」と呼んだりします。木ですら、そのまま製材して用いるのでなく、工業製品の原料となることが多くなっています。大根をかつらむきするように剥いで、糊で貼り合わせた合板。建てれば家の壁になってしまうパネル。細かい木を集めて接着した集成材。みな、工場から規格品として出荷される製品です。これら木の加工品は、無垢の製材品に対して「木質系」などと区別して呼ぶこともあります。木の持つバラツキを減らし、構造性能の高い木質系材料は建材として優れている点もありますが、接着剤や廃棄時の処理など環境に対する問題も指摘されています。また、木の家をつくるのでも、仕口継手などによらず、簡単に木と木をジョイントしていくことのできる「接合金物」も登場し、経験と技術を必要とせず、だれが施工しても住宅として造り上げることができるようにはなりました。　 第二次大戦後は、焼け跡からの復興、大都市への人口集中への対応といったことから、たくさんの家を短い間に大量供給することが急務でした。しかも日本の山も荒れ果て小断面の木しか得られない状況でもありました。その過程で、家をつくる工業技術や生産のしくみは、いかに工事内容を簡略化し、大量生産に適応させるのかが必要な時代でした。それが戦後復興に引き続く高度経済成長を支える重要な工業生産分野となっていきました。寸法の整った、狂いの少ない、品質管理が行き届いた規格部品で組み立てる家づくりが、一軒一軒、木のクセを見ながら刻み、組み上げていく家づくりよりも時代のニーズに合っていたのです。木を見極める眼や手の技がなくても簡単に造れるつくり方つまり、木の家といっても木をすべて隠してしまうようなつくり方であれば、経験の浅い人でも、短い工期で家を完成させることができるようになってしまいました。その結果として、材料は分厚いカタログの品番ですべて決めることが可能となり、家づくりは品番の集合体になってしまいました。お隣との違いは、メーカーと品番の違いだけということになってしまったのです。こういう家づくりを私たちは求めていたのでしょうか？

■今、ふたたび注目される自然素材

ところが、ずっと右肩上がりで進んできた高度経済成長にも、はっきりと眼に見える形で、かげりが出てきました。経済成長が停滞しただけでなく、環境問題をはじめ、工業化にともなうひずみも、目立ってきました。住の分野では、新建材で建てた家に住むと、眼がチカチカする、動悸がひどくなるなどの健康被害が起きる「シックハウス症候群」が話題にのぼるようになってきました。製材した木を使っていても、防腐剤や防蟻剤がそのような症状を引き起こす例も報告されています。 大量生産は大量消費をともない、その結果として大量廃棄の問題も、深刻になってきています。今の家は平均寿命がせいぜい、30年そこそこだというのです。新建材でできた家は住まれなくなると、どうなるのでしょう？　解体された後の建築廃材の大部分は、土に還らないゴミとなります。昔ながらの家であれば、木を再利用することもできたし、そうできなくても、木や土は、土に還るのに･･･。今ある家々が、数十年以内にはみなゴミになるのだと想像してみたら、末恐ろしくなりますよね。 もう一方で、川の上流に目を向ければ、植林されたものの、手入れされずに荒れた山が目立ちます。新建材の台頭と外国産材の輸入自由化により、国産材が使われなくなっているからです。緑に覆われたこの日本で、身近な山の木を使わなくなったために、森林の保全・育成のサイクルが崩れ、治山治水の要である山々が荒れているとは、なんともおかしなことです。空気中の炭酸ガス濃度があがることにより地球温暖化が進んでいることが国際的な問題となっています。CO2濃度の削減を国家間で約束する「京都議定書」を守るためにも、健全な森を育てること、建築資材になってもなおCO2を蓄え続ける木を使った家を建てることには、とても重要な意義があります。 このようなさまざまな文脈で、国産材をはじめとして、身近なところで手に入る「自然素材」が、ふたたび注目を集め始めているのです。

地球生活記～世界ぐるりと家めぐり
小松　義夫　写真・文
福音館書店刊

amazon.co.jpで購入できます

日本の家の内部。見えている部分の素材は？

木	床、敷・鴨居、梁、天井、障子の枠と桟
草	畳の芯と表、障子の紙
土	鴨居の上の壁

ハウスメーカーで売り出す新建材の家

うすく剥いだ木（ベニヤ）を糊で貼り合わせた合板。大きな面積を覆うのに便利。

木の循環の仕組み

図（出典）有馬孝禮先生の講義よりアレンジ

木を使って家を建てると･･･
・木は材木になっても、Cを固定してくれる。
・植林をすれば、木は再生産される。
・その木がまた、Cを固定してくれる。

(c)松井郁夫建築設計事務所のWebサイトより転載

http://www.matsui-ikuo.jp/

Like 0　ポスト

1 2

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事

2019年6月15日 やさしくて強い、理想の家を求めて: アイ設計研究室 大前泰秀さん
2019年5月15日 磨き上げた職人技で、木を生かす：西岡建築一級建築士事務所　西岡健一さん
2019年4月20日 大工と左官の職人プロジェクトチーム 総合建築植田 植田俊彦さん 俊司さん
2019年4月10日 本物の家づくりを、自由に、楽しんで：株式会社木神楽　高橋一浩さん
2019年1月5日 新春特集 2018年のベストショット集
2018年12月29日 板倉仮設住宅 移設ものがたり part3 大工の声＆今後の課題編
2018年12月17日 板倉仮設住宅 移設ものがたり part2 実録編
2018年12月14日 板倉仮設住宅 移設ものがたり part1 概要編
2018年9月4日 番匠 剱持工務店 副棟梁・剱持大輔さん
2018年8月15日 鶴岡総会予告 その１　散るより、生き延びよ！

人気のある記事

伊勢神宮遷宮・御杣始祭り：300年の大木を伐る！ 16件のビュー
冬の温熱調査合宿報告 15件のビュー
日本人の暮らしと木 13件のビュー
大工たちによる「家戻し」の記録 12件のビュー
設計士・丹羽明人さん(丹羽明人アトリエ)：納得できる答を探して 11件のビュー
第三回これ木連フォーラム「伝統構法はこれからどこへ向かうのか？」の報告 11件のビュー
「職人がつくる木の家」づくりを未来につなげるアンケート 11件のビュー
古川 保の熊本市川尻町 震災日誌 11件のビュー
込み栓角ノミ 復活！松井鉄工所訪問記 11件のビュー
サツキとメイと私の家：愛・地球博レポート 10件のビュー

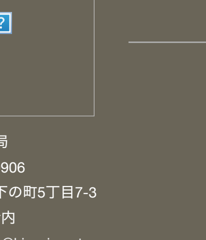
この記事のタグ

木の家そもそも話
環境と共生する家づくり

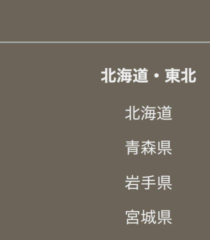
同じタグがついた別の記事

2003年3月25日 建具という装置
2003年8月25日 緑のある家
2006年9月1日 道具と大工
2010年6月30日 土壁の魅力
2003年2月25日 柱の家

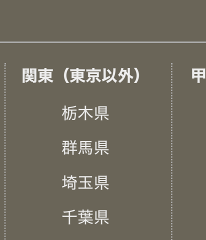
関連する記事はこちら



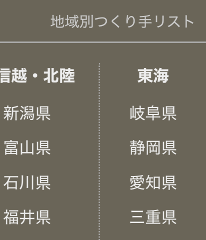
土壁の魅力



柱の家



縁のある家



建具という装置

道具と大工

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島舎内
mail： jimukyoku@kino-ie.net
tel： 086-486-5464

(C) 職人がつくる木の家ネット /Shokunin ga Tsukuru KINO-IE net, All rights reserved.

そもそもの話　大地と太陽の恵み

ライター エッセーの場為の場

そもそも話 [木の家]

▲タイトルイラストは、「地球生活記」の写真をもとにおこしたものです。（イラスト／持留和也）

1 2

このページは印フォーマットで表示しています。

Like 0　ツイート

■大地のはらわた

こんな言い方もできます。「プラスチックだって、もとは石油でしょう？　自然素材といえないの？」たしかに、新建材や化学物質も、原材料をたどっていけば、どれもが自然のもの、だったはずです。自然から生まれたものであっても、土に還らない。この差はどこからくるのでしょうか？　それについての科学的な答えは専門家に譲るとして、そのヒントとなる言い伝えを紹介しましょう。アメリカインディアンやオーストラリアのアボリジニにこんな伝承があります。「母なる大地のはらわたを引きずり出して用いてはいけない。災いが起きるであろう」アメリカとオーストラリアといえば、地理的には遠く離れていますが、鉄器を知らない文明がずっと続いてきた点においては、共通しています。ほかのネイティブといわれる社会にも同じようなことが伝えられているかもしれません。「大地のはらわた」とはなんでしょうか？　大地を深く掘って出てくるもの、つまり地下資源です。ところが、現代のわれわれの社会はいかに、地下資源に多くを頼っているのでしょうか！　燃料となる、石油、石炭、天然ガス。鉄鉱石、ウラン。いずれも工業社会の生産にとっての原料となり、燃料となるものばかりです。「大地のはらわた」の特徴は、長い時間かけてつくられる、ということです。たとえば石油や石炭は、数億年も前の動植物の死骸が地層の間に圧縮されたものです。鉱物は、大地そのものがしゅう曲したり、噴火したりした後、何千万年も何億年もかけて圧縮され、かたちづくられるものです。大地と大陽が断大な年月をかけて堆積したエネルギーを、解放し、利用しているのが現代の人間なのです。そして、不思議なことに、長い年月がかかって堆積したエネルギーほど、土に還らないし、そのエネルギーを解放するのに莫大なエネルギーがかかるのです。

■再生可能な資源と自然エネルギー

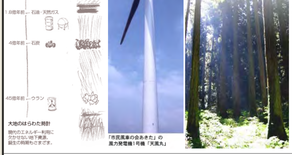
ところで「大地のはらわた」は無限に存在するわけではありません。石油は燃やしたり、加工したりしてしまえば、そこから元の石油をつくりだすことはできません。不可逆な素材なのです。一方、自然素材として見直されているキやよ、竹や草はどうでしょうか？　植物は、種や挿し木で再生産することができます。大陽と大地の恵みを受けて、苗木が育って、建築材料になるのに100年もかかりますね。土も同様です。土と水を練って塗った壁が壊れれば、土に戻ります。またその土を練って塗ることができるのです。

「地球生活記」に話を戻してみると、あらためて、世界中の昔ながらのスつうの家には、「大地のはらわた」を使っていないことに気づきます。言い換えれば、身近にあるものとは、大地の表面にあるもののことだったのです。最近よく話題になる「自然エネルギー」とは、長い時間をかけてできてきた「大地のはらわた」を使わないものです。太陽エネルギー、風力、水力、潮力、地熱。どれもが、太陽と大地のランデブーの果実として、今まさに生まれたものであり、同時に環境への負荷が最小限で済むものです。それは「大地のはらわた」から解放されるエネルギーと比べれば小規模ではあるものの、その地で分散的に生み出すことができます。現実に譲ってもそれ用できるような形になるには、もう少し人間が成長する必要がありそうですが。　同じように未来に向けて有用なエネルギーと目されるものとして「原子力」がありますが、同時に、放射能や廃棄物の面で弊害やリスクが憂慮されてもいます。そのそもそもの成り立ちが、元素の中でもちっとも半減期の長い、ウラン鉱石を地中深くから掘り起こして得られることに思い至ればこれも「大地のはらわた」の仲間といえそうです。

■自然素材とのつきあいかた

ところで、自然素材がブームのようになるのと同時に、困った現象も起きています。工業製品、規格品に慣れてしまった人々が、自然素材とのつきあいかたを忘れてしまっているのです。たとえば、木は乾燥していると同時に割れたり、裂けたりします。これが工業製品だったら、「不良品」でしょう。また、木には一本一本、独特のクセがあります。そのクセに応じて、家の材料にするときの使い方を変える、という本来の知恵が多くの人に忘れられています。「自然はたしかにいいのだけれど、不揃いや良いくいのは困る」という矛盾した反応が、結構あるのです。自然素材とつきあうのであれば、まずは、素材に学ぶことです。無垢の木の床はあたたかいことを実践するのであれば、次第に床板同士の間に隙間があいてくることも認めなければなりません。あらかじめ使った梁に、構造的に支障のない割れやヒビが入ることについても鷹揚になる必要があります。自然素材である以上、規格にのらない個性もちつし、時とともに変化もするのですから。その上で、手入れや補修のしかたを学び、家も人もともに成長していく。時が経てば経つほどに、愛着がわいてくる。自然素材の家に住むとはそういうことなのです。

「自然素材で家をつくる」ことは、何も新しいことではなく、「地球生活記」にも見られるように、普遍的で、あたりまえなことです。たかだか戦後60年。その間に、「あたりまえ」が失われ、今ふたたび、それを取り戻そうとする動きが出てきたのです。ところが、いちど社会がその「あたりまえ」から離れたために、本来の感覚を取り戻したり、ぶつ切りになっているつながりを結り合わせたりするのに、意思やエネルギーがいるようになっていることもたしかで、自然素材を「選ぶ」という確信が必要です。それでもなお、自然素材を志向する人が増えているのは、社会がこれから向かおうとしている方向を示唆しているかのようです。



今、確認されている
地下資源の埋蔵残量

石油	あと41年分
天然ガス	あと63年分
石炭	あと218年分

くわしくは私の環境サイトで

http://www.wenet-akita.jp/

Like 0　ツイート

1 2

関連する記事はこちら

土壁の魅力

柱の家

緑のある家

建具という装置

道具と大工

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島海内
mail：jimukyoku@kino-ie.net
tel：086-486-5464

(C) 職人がつくる木の家ネット /Shokunin ga Tsukuru KINO-IE net. All rights reserved.